

保育者の「子育て支援」に関わる専門性と リカレント教育（その1）

－山梨県内の保育士への調査結果をてがかりとして－

川池 智子

要 約

本研究は「子育て支援」に関する、保育者の専門性とリカレント教育について、その福祉的側面の検討をあわせて考究するものである。

本稿では、この研究の目的及び保育士の専門性とリカレント教育について、この研究の観点をおさえた上で、筆者が2004年に実施した「子育て支援」に関する山梨県内の二つの保育士会会員へのアンケート結果のうち、「研修」に関する自由記述の内容を分析した。その結果、研修への希望で最も多かったカテゴリーは「保護者との関わり方・子育て支援について」「実技－「遊び」について－」「他の園・保育者との情報交換・学び合い」「事例検討や「話し合い」」の4つであった。それらをさらに、保育者経験年数5年未満、5～10年未満、10～20年未満、20年以上という4つのグループに編成したところ、各年代の特徴を確認することができた。なお、紙幅の関係上、今回はこの研究の視点、及び第1章、第2章を掲載し、以下は次年度に報告する。

キーワード：保育者、子育て支援、リカレント教育

研究の視点

本研究は「子育て支援」に関する、保育者の専門性とリカレント教育^{注1)}について、その福祉的側面の検討をあわせて考究するものである。

いわゆる「子育て支援」とは、政策的には少子化対策として1990年代に登場したものであるが、筆者は、現代社会に広がっている「子どもを育てるこの困難さ」を予防的にあるいは問題対処的に専門職が中心となって支援する児童家庭福祉のシステムととらえている。中でも幼児期においては保育者が支援の専門職として大きな役割をもっていると考える。ここでいう保育者とは、基本的には保育士資格あるいは幼稚園教諭免許を持って乳幼児期の子どもの保育や親の支援にあたるものである。^{注2)}

本稿では、まず、保育士の専門性とリカレント

教育について、この研究の観点をおさえた上で、筆者が2004年に実施した「子育て支援」に関する山梨県内の二つの保育士会会員へのアンケート結果のうち、自由記述の「研修」に関する部分を元に、保育士自身が求める「子育て支援」に関するリカレント教育について考察する。なお、紙幅の関係上、今回はこの研究の視点、及び第1章、第2章を掲載し、以下は次年度に報告する。

ところで、保育士はそもそも何の専門職であろうか。

2006年6月発行の『月刊福祉』の特集は「今、福祉現場に求められる専門性」であったが、特集の10本のレポートのうち、2本が保育士によるものであった。この特集において、蟻塚（2006）は、「福祉専門職の中核は社会福祉士、介護福祉士、精神保健福祉士、保育士の有資格者である」としている。

(所 属)

山梨県立大学 人間福祉学部 福祉コミュニティ学科

保育士は社会福祉の専門職であるか否か、ということを、これまで理論的に論議されたものを散見していないが、保育所は児童福祉施設であり、保育士が福祉現場の専門家ということは法的な観点からはいえるであろう。

ただし、保育所は幼稚園と共に、幼児期の教育機関としての側面もあり、教育と福祉の両方にまたがる存在としてとらえることもできることから、保育士の専門性も、教育、福祉、双方から検討する必要がある。

保育所保育指針では、保育の特性を「養護と教育が一体となって、豊かな人間性を持った子どもを育成する」とされており、「養護」が子どものケア、福祉につながる意味を持っている。

保育士の専門性における福祉的側面を強めたのが、2003年の児童福祉法改正であるといわれている。保育所の機能として、「子育て支援」がもりこまれたのである。

「子どもを取り巻く環境の変化に対応して、保育所には地域における子育て支援のために、乳幼児などの保育に関する相談に応じ、助言するなどの社会的役割も必要となってきている。」（保育所保育指針）とされた。

鑑ら（2000）は、「子育て支援という保育サービスに対する新しい考え方を背景に、子どものためだけの保育ではなく、親子関係の揺らぎや希薄化を調整し、親と子の両方を安定させるといった課題に取り組むことが求められている」という野沢の論を紹介し、ゆえに、親子関係を調整するといった援助に対する技術への課題をはじめとして、社会福祉援助職としての保育士の専門性に対する再認識を保育関係者に迫っている。

「子育て支援」は従来の、保育士の「専門性」に含まれていたことなのか、それとも新しいものなのか、その専門性とリカレント教育はどうに関連しているのか、この疑問から、本研究はスタートした。^{注3)}

1、保育士の「専門性」とリカレント教育

保育所保育指針では保育士の専門性に関する項目では、以下のように書かれている。

保育士は常に研修などを通して、自ら、人間性と専門性の向上に努める必要がある。また、倫理観に裏付けられた知性と技術を備え、豊かな感性と愛情を持って、一人一人の子どもに関わらなければならない

ここでは、保育士が、何の専門性を持っているのかということへの言及はない。この文のとおりに読み解くと、研修＝リカレント教育によって、「人間性」「専門性」を向上させることが求められていること、その二つに加えて並列的に「倫理観に裏付けられた『知性』と『技術』」「豊かな『感性』と『愛情』」を保育士が「持つべきもの」とされている。このまま読むと、では、保育士の「専門性」とは何なのか、という疑問がさらに深まる。

「専門性」について「資格」という観点からみると、保育士が国家資格として法律に位置づけられたのは、2003年である。児童福祉法が改正され、「保育士の業務」は「保育士の名称を用いて、専門的知識及び技術をもって、児童の保育及び児童の保護者に対する保育に関する指導を行う（児童福祉法第18条の4）」と法定化された。保育士の国家資格化は、社会福祉士や介護福祉士の国家資格化（1988年法施行）より遅いが、任用資格としては、すでに1948年に制度化されており、わが国で最初に制度化された「福祉専門職」ということもできるであろう。専門職の条件の一つとされる専門職団体も、現在と名称は違うが、既に1956年に設立されている。

しかし、国家資格化されたこと、専門職団体があることだけで、「専門性」の確立した「専門職」であるとは言いがたい。医師や看護師等と異なり、保育士や社会福祉士の「専門性」への社会的評価は高くはない。

保育士や社会福祉士の業務が名称独占であって業務独占ではないから、という点も関わっているのかもしれない。

他方、学際的な分野であることへの評価の低さを指摘する論者もいる。岸井（2000）は河合（1992）の言葉を引用しながら、次のようにいう。

「保育者の専門性は、外部の専門性に対しては案外弱い。それは保育学が医学や心理学、教育学

表1 保育士の研修体系

	1. 専門職としての基礎	2. 専門的価値 専門的役割	3. 保育実践に必要な専門的知識・技術			4. 組織性
			(1) 子どもへの保育実践	(2) 保護者への関わり ソーシャルワーク	(3) その他	
初任者	□ センス、感性 □ 觀察力 □ 共感性 □ 愛情 □ 柔軟性 □ 倫理観 □ 道徳性 □ 責任感 □ 主体性 □ 達成意欲 □ 行動力 □ 情熱 □ 協調性 □ 創造力 □ 自制心 □ コミュニケーション □ 一定の生活習慣と社会的マナー（4.組織性参照）	□ 子どもの尊重 □ 安全・食事等の理解 □ 保育計画・指導計画 □ 基づく保育実践 □ 保育実践の向上（健康、人間関係、環境、言葉、表現） □ 指導計画の立案 □ 記録のとり方・生かし方 □ 応急手当等緊急時の対応 □ 発達の気になる子や障がいのある子への対応 □ 保育のアセスメント □ 利用者の代弁 □ 地域子育て支援	□ PDSA（保育過程、アセスメントから実施、改善）の基礎的理解 □ 一人ひとりの子どもたちがいる状態および家庭、地域社会における生活実態の把握 □ 基礎的な相談援助技術の理解	□ 社会の動向、変化の理解 □ 不審者への対応 □ リスクマネジメント、安全管理	□ 社会人としてのマナー・職務規程、職場のルールの理解 □ 組織における役割や連携の理解 □ 個人情報保護の理解 □ 研修についての理解 □ 会議についての理解 □ 保育士会組織の理解	□ □ □ □ □
中堅職員	□ 保育的根拠に基づいた保育実践 □ 科学的・理論的根拠 □ 倫理的指導	□ ソーシャルワークの構成理解 □ 善きカースペースへの対応 □ コミュニケーションのあり方の理論的理解 □ 相談援助技術の理解 □ 保育ソーシャルワークの展開 □ ソーシャルアクション □ 関係機関・NPO・ボランティア・地域等との関わり	□ 関係機関とのケーブル検討会議 □ 関係法令の理解 □ 専門性向上のための研究活動 □ 体験学習・インクルーシブ指導	□ 新任職員への助言・指導 □ 保育所全体の活動の理解 □ 職場の課題解決手法の理解Ⅰ（自己評価） □ 中堅職員への助言・指導 □ 保育士のサポート □ 主任保育士のサポート □ 中堅職員の課題解決手法の理解Ⅱ（第三者評価）	□ □ □ □ □	
リーダー的職員	□	□	□	□	□	□
主任保育士等管理的職員	□	□	□	□	□	□

全国保育士会『保育士の研修体系～保育士の階級別に求められる専門性～』2007年

等からの「借りものの学で、まだそれ自体の存在を確立していない」ことによるのかもしれない。」

河合（1992）の言葉を借りて述べると、「借りものの学」は「借りものの学」のまま居続けることはない。ある授業で学生に尋ねたことがある。「じゃがいもと人参と玉葱、お肉を煮込んで香辛料をませたら何ができますか？」そのまま齧るとなかなか食べにくい硬いじゃがいも＝「カレー」ではないのだ。

例え先行した学問のいくつかから理論や技術を借りた学際的なものであっても、専門性が低いとはいえない。むしろ、専門性が高いか低いかには別の要因があると考える。これは社会福祉士等の専門性にもいえることである。そこにリカレント教育のあり方が関わっているのではないか、と筆者は考える。

なお、全国保育士会では、保育士の専門性向上の取り組みの一環として、今年度、『保育士の研修体系～保育士の階層別に求められる専門性～』を発行したばかりである。この報告書は、初任者、中堅職員、リーダー的職員、主任保育士等管理的職員という4段階の階層を定め、保育士の専門的研修を体系化する試みがなされていて、専門性とリカレント教育との関係を考える上で重要な資料である。（表1）ただし、報告書の中にも書かれているように、現時点で確固とした保育士の研修体系や専門性が「確立」されているわけではない。

むしろ保育士の「専門性」というものは、村井（2001）が指摘するように、これまでの「専門職」モデルの中にはないのかもしれない。村井（2001）は保育実践の複雑さや多様さを支える専門性は、「技術的合理性（Technical Rationality）」に基づいた理解では把捉し得ない非合理的かつ非技術的な部分にかかわるところが大きいこと、ドナルド・ショーン（Schon, D. A.）が提起した「反省的実践家（reflective practitioner）」モデルによって際立たせられる側面があるとする。「反省的実践家」モデルについても、第2報以降でさらに考察する。

ここでは、次に、筆者が行った2004年の保育

者調査を通して、保育士のリカレント教育について考える。

2. 保育者研修に保育者が求めるもの

－山梨県内の保育者調査から－

(1) 調査方法

この調査は2004年10月に、山梨県内の二つの地域の保育士会加盟の保育者を対象に「少子化時代の子育て支援に関する保育者アンケート」というテーマで実施したものである。^{注4)}（配布数644名、回収数339、回収率52.6%）調査項目は全部で28項目、このうち5項目は自由記述で構成され、フェースシートとして、性別、職位、年代、保育者経験年数、属する保育所が公立か私立かを尋ねた。

調査結果は2005年度、2006年度にそれぞれ、学内紀要に掲載している。^{注5)}

今回は、研修への希望への回答を使いながら、子育ち・子育て支援とリカレント教育について検討する。

なお、調査に対応させるために、この調査を実施した年の山梨県児童家庭課、山梨保育所連合会、山梨県保育士会、筆者が調査を配布した二つの地域の保育士会の各研修プログラムを最後に資料として添付している。

(2) 分析方法

研修の希望に関する自由記述については、2006年の論文で用いた「障害を持つ子ども、発達が気になる子どもに関する記述」以外の回答について、複数のテーマがある回答については切断化し、書かれている内容をもとにカテゴリー生成した。^{注6)}そして、まず、それらの中で最も多かったカテゴリー4つ「保護者との関わり方・子育て支援について」「実技－「遊び」について－」「他の園・保育者との情報交換・学びあい」「事例検討や「話し合い」」の回答を中心に、それらをさらに、保育者経験年数5年未満、5～10年未満、10～20年未満、20年以上という4つのグループに編成しなおし、各グループにおいては、年代順（20歳代、30歳代、40歳代、50歳以上）に並

べた。

次に、年代的に特徴のあるカテゴリーを二つとりあげた。

(3) 分析結果

回答全体を見ると、研修内容への要望として多かったのは、保育に関わる知識・技術として「保護者との関わり方・子育て支援について」という回答(44人)、「実技研修の中で「遊び」に関する回答(36人)であった。このアンケートのテーマが「子育て支援」であり、保護者との関わり方を学びたいという記述が多かったのは当然かもしれない。

実技的な研修への希望は、遊びに関するものほか、「保育技術・実践にすぐに役立つもの」を希望するという回答が29人からあった。「保育技術 実践にすぐに役立つもの」の具体的な内容の例は以下のようなものである。

トイレトレーニングについて学びたいです。/いろいろな子どもがいて預かるので各種パターンで子どもに対してのあつかい方の研修をしてほしい。/噛みつきの原因と対処の仕方。/子どもの怒り方、ほめ方、言葉がけについてなど/子どもを引き付ける話術。子どもが落ち着いてゆったりと過ごせる環境や保育の仕方など。

なかには、「私は、県の保育士資格試験を受けて、保育士となり、四年半、保育所の嘱託として働いてきたが、本を読んだり、見よう見まねの保育なので、基本的なこと、技術が足りない。音楽的指導、美術的指導、体育的指導の基本的な研修を受けたい」というオープンな記述もあり、資格をどういう形でとったかによっても、求められる研修内容が異なるのかもしれないということに気づかされた。

その他、数としてはそう多くないカテゴリーとして心理関係(子どもの心理、子どもやその親に対しての心理カウンセリング的研修)(13人)、「子どもの発達」に関する内容(7人)、「子どもの病気、感染症や応急処置、病中病後児の養護マニュアルや薬に関する研修」(15人)、「食育、食事アレルギー」(3人)、「虐待の研修」(2人)があった。

「研修方法について」の記述は予想したより多く、中でも目だったのは「他の園・保育者との情報交換・学び合い」(18人)、「事例検討や「話し合い」(13人)だった。

具体的な内容としては、一人だけが記述した内容であっても、看過することができないものもあった。例えば「とびとびであちこちの研修に参加するのではなく、体系化した研修を受けたい。〈30歳代・保育者経験5年未満〉」「理論や技能が、研究や現場の実践が、しっかりと結びついて得られる、幅広い、複合型の研修。いずれ、男性保育者向けの研修もできるようになれば、と思う。〈20歳代・男性、保育者経験5~10年未満〉」といった、研修のあり方の本質にせまる記述、「保育士単独の研修だけでなく、保健師、栄養士とのつながりを持って聞けるような研修〈40歳代・保育者経験20年以上〉」「他職種との連携について、どのように生かし、連携を上手くもつていけるか。また、他の職種の取り組みの内容なども知りたい。〈20歳代・保育者経験5~10年未満〉」というような保育士以外の専門職との連携の方法を学びたいという、今日的課題への言及である。

「大学の先生の話より、現実に今働いている保育士や保健師の声を聞ける研修〈30歳代・保育者経験10~20年未満〉」というような耳の痛い回答もいくつかあった。

これらを年代別に分け、その特徴を見てみる。

そもそもなぜ、保育者経験でわけたかというと、選択肢による設問23項目の回答の集計結果から、年代によって子育ち・子育て問題の受け止め方の差が大きかったこと^{注7)}から、自由記述においても年代によって回答の傾向が異なるのではないかという仮説をもったからである。

研修に関する自由記述の主たるカテゴリーとその回答を、保育者経験5年未満、5~10年未満、10~20年未満、20年以上の4つにグルーピングした結果、今回の分析においても保育者経験年数による特徴、傾向が見えてきた。

年代順にみていくと、表2にあるように、「保育者経験5年未満」という、経験が浅い年代の保育者が、「保育技術の研修」を多く望んでいるの

は当然かもしれない。ただし、ベテランの域にあると思われる、「保育者経験 10~20 年未満」のグループにあっても、「保育技術の研修」の希望が少ないととはいえない。

その他に、「保育者経験 5 年未満」のグループで特徴的だったのは、研修方法に関する記述の中で、「他の園・保育者との情報交換・学びあい」、「事例検討や「話し合い」を希望する内容が多かったことである。「各園で実施されている保育の方法、活動内容などがわかる研修がもっとあって良いと思う。自園や他園の良い所、悪い所、改善点が見えてきてよりよい保育ができるのでは…と思う。〈20 歳代〉」「他園での様子や、工夫している点など、意見交換するなど。〈20 歳代〉」「さまざまな研修がある中で、ただ話を聞くだけでなく実践的なを取り入れたり、さまざまな事例を元にした話等を多く聞き、保育に生かしていきたいと思う。〈20 歳代〉」「ケースワークとまでは言えなくとも具体的な保育場面に対するアドバイスをいただいたら考察するといった研修があったらと思う。〈20 歳代〉」というように、より具体的に他の園の保育者と意見を交換すること、講義形式ではなく、事例研究による研修への希望が多いことが確認された。

「保育者経験 5~10 年未満」のグループで特徴的のは、研修方法に関する記述の中に、「他職種との連携について、どのように生かし、連携を上手くもっていけるか。また、他の職種の取り組みの内容なども知りたい。〈20 歳代〉」や「理論や技能が、研究や現場の実践が、しっかりと結びついて得られる、幅広い、複合型の研修。」といった回答である。中堅保育者への入り口にさしかかり、俯瞰的な視野を持つことができた保育者の存在を確認することができる。なお、他の専門職との連携については、保育者経験 10~20 年未満、20 年以上のグループの中にも言及している回答がある。

「保育者経験 10~20 年未満」のグループで特徴的ことは「保護者との関わり方・子育て支援について」の研修が多く希望されていることである（15 人）。このグループは、アンケート回答者

が全部で 68 人^{注8)}であるから、68 人中、15 人、2 割以上がこのカテゴリーにあたる記述をしていくことになる。

30~40 歳代を中心としたこのグループは、中堅からベテランの域にある保育者であり、かつ、保育所に通う乳幼児の親よりも平均的に年齢が少し高いと思われる層である。2005 年の論考をまとめたが選択肢による回答では、「保育者経験 10 年未満」の保育者に比べ、「保育者経験 10 年以上」の保育者は、親たちの子育ての力をかなり低くみていたことと関連があるのであろうか。経験の浅い、若い保育者より、保護者の問題点が見えやすいのか、保護者への支援がより重要であると考えているのか、現段階で明確な回答を得ることはできないが、今後さらに検討したい重要な部分である。

「保育者経験 20 年以上」のグループの特徴は、「実技 - 遊びについて -」の回答が少ないことがある。主任や園長、リーダークラスも多く含まれる年齢層であり、自分自身が求める研修内容としては少ないことは当然であろう。

さらに、回答を整理しているうちに見えてきた、特徴のあるカテゴリーについてみてみたい。（表 6、表 7）それは「法制度について」「人間性や保育者としての意識の向上」のカテゴリーである。

前者の回答者は 10 人だが、その属性は、主任 4 人、園長 1 人と半数が指導する立場にある。以下の回答に代表されるように、主任クラスから、保育政策が大きく変動し続けている時代の保育者研修の課題を指摘している。

「保育所にどんどん増えている事業についての説明：主任という立場なのでいろいろ聞く機会があるが、保育士の大半が事業の内容、補助金について何も知らないので、経営者側にいいように説明されて、納得いかないまま、ただ仕事が増え続けているので、きちんと理解して仕事をしたり意見を言えるようにしたい。[主任] 〈20 歳代〉 保育者経験 5~10 年」

「実技研修、保育についての課題は、園内で研修しながら学べるが、今後保育園はどのようになるのか、国が補助金を停止したときには…と思うと、私たち保育士は、どうなるのか。子育て

表2 [保育者経験5年未満]

I 研修内容について
(1) 保護者との関わり方・子育て支援について
①②③保護者、家庭とのよりよい連携のやり方。(3名) ④保護者との信頼関係を気付いていくにあたってのコミュニケーションの取り方。 ⑤保護者様とうまく付き合うにはどうしたら良いか、などを知りたい。 ⑥母親への相談援助の仕方について。 ⑦保護者とのコミュニケーションの仕方を学びたい。子ども同士のけんかについて、親にどのように伝えていくべきか、学びたい。(けがをしてしまい、そのような対応など) ⑧保護者は、保育所(保育者)に対して、どのような支援を望んでいるのかということ。また、その望みに応えていくために、どのような対応や取り組みをしていったらよいのか。 ⑨育ちそびれている子どもや大人になりきれない親に対してのケアについて。 ⑩実際に子育て中の人が障害児を育てている人などの体験談を聞く機会があったら良いと思う。大学等の先生の話も良いが、今子育て真っ最中の人の話が聞きたい。〈以上の回答は、すべて20歳代〉
(2) 実技－「遊び」について－
①実際の保育で活用できることを学んだり、身につけていきたい。(手あそび、おゆうぎなど) ②即現場で使える手遊びなどの実技的なもの。 ③覚えやすい手遊びやスキンシップのとれる遊びを学びたい。 ④手あそび。 ⑤手あそび、パネルシアターなど。 ⑥手あそび。踊り等。 ⑦新しい手あそび、手作り制作など。(親子で遊べるようなもの) ⑧具体的な保育遊び。 ⑨日々の遊びや工夫していること、手あそびなど。 ⑩手話を使いながらのダンスなど体を動かす研修。 ⑪手品や手遊びなど子供が喜んで注目してくれるもの。〈以上、すべて20歳代〉
II 研修方法について
(1) 他の園・保育者との情報交換・学び合い
①ほかの園での考え方、方針を具体的に感じられるような実習のような研修。意見交換など実際の保育中で問題、悩んでいることなど相談したり勉強したりできること。〈20歳代〉 ②さまざまな保育者の経験を聞いたり、悩み、難しい事などを話し合いたい。〈20歳代〉 ③各園で実施されている保育の方法、活動内容などがわかる研修がもっとあって良いと思う。自園や他園の良い所、悪い所、改善点が見えてきてよりよい保育ができるのでは…と思う。〈20歳代〉 ④他園での様子や、工夫している点など、意見交換するなど。〈20歳代〉 ⑤いろいろな園の先生方と話し合ったり情報交換をしてみたい。〈20歳代〉 ⑥園のあり方。子どもによい環境。(具体的な例をあげて、特色のある取り組みをしているほかの園の紹介、よい所など)〈20歳代〉 ⑦他園の保育のやり方(怒り方)を先生たちと交流を深めながら聞いてみたい。〈20歳代〉 ⑧保育者の間での他園の状況や話を聞ける研修。(できれば同年齢同士で行いたい)〈20歳代〉 ⑨他園等の交流(お互いの良いところを見れる様なコト)など〈20歳代〉 ⑩他園の保育の様子。〈20歳代〉 ⑪他園と情報交換。〈20歳代〉 ⑫他園と視察研修。〈20歳代〉 ⑬現在の現場の様子や、他よりすすんだ事を取り入れて成功している実例等。実際に見聞き出来ると、より充実した研修に思えます。[40歳代・保育者経験5年未満]
(2) 事例検討や「話し合い」
①事例検討における子どもの育ちや関わりについて。 ②具体的な事例を挙げ、どのような対処によりどう変わっていったのか等知ることで、今後の対応の参考にしたい。 ③さまざまな研修がある中で、ただ話を聞くだけでなく実践的なものを取り入れたり、さまざまな事例を元にした話等を多く聞き、保育に生かしていきたいと思う。 ④実例を通しての話。 ⑤子どもをどのようにしたらひきつけられるかなど、ベテラン保育士の方の実際、現場を通しての意見が聞ける研修をしてほしいです。(新人だけとかでもよいので) ⑥ケースワークとまでは言えなくとも具体的な保育場面に対するアドバイスをいただいたり考察するといった研修があったらと思う。〈以上の回答は、すべて20歳代〉
(3) その他
①保健師さんのお話を聞いたり、質問を聞いてもらいたい。[20歳代・保育者経験5年未満] ②とびとびであちこちの研修に参加するのではなく、体系化した研修を受けたい。〈30歳代〉

表3 [保育者経験5~10年未満]

I 研修内容について
(1) 保護者との関わり方・子育て支援について
①～⑤保護者とのかかわり方についてなど。〈20歳代〉(5人)
⑥困った保護者への対応の仕方。〈20歳代〉
⑦保護者とのコミュニケーション技術[園長]〈40歳代〉
⑧保護者への対応の仕方。〔常勤・50歳以上・保育者経験5~10年〕
(2) 実技-「遊び」について-
①造形研修や遊び、リトミックなど、参加型のものをしてみたい。〈20歳代〉
②手遊びや手話など日常の保育にいかせる研修がもう少し多い方がよい。〈20歳代〉
③実践：手遊び、歌、巧技台等実践的スキルの向上。〈20歳代〉
④手遊びなど実践的な研修。〈20歳代〉
⑤手遊びや簡単なルールのゲーム。〈20歳代〉
⑥日頃の保育に生かせる研修内容にしてほしい。(リトミック、造形、手遊び etc)〈20歳代〉
⑦新しい保育(手あそび、あそび方、歌、リズム遊びなど)〈20歳代〉
⑧昔なつかしの遊び(かごめかごめなど)。〈30歳代〉
⑨子どもの遊ばせ方。集中させる方法。身の回りの物を使った遊び等。〈30歳代〉
⑩リズム遊び(リトミック研修)〈30歳代〉
II 研修方法について
(1) 他の園・保育者との情報交換・学びあい
①他園との意見交換の場。製作物(こどもの)についての職員研修会をしてほしい。〈20歳代〉
②各園の保育室の使い方。〈20歳代〉
③他の園長や経営者の意識調査とか、他県との比較や交流。〈30歳代〉
(2) 事例検討や「話し合い」
①テーマを決め各園ごと発表したりグループ討議ができるような研修〈20歳代〉
②話し合い形式。〔常勤・30~34歳・保育者経験5~10年・公立〕
(3) その他
①《他の専門職との連携》他職種との連携について、どのように生かし、連携を上手くもっていかれるか。また、他の職種の取り組みの内容なども知りたい。〈20歳代〉
②《理論・技能、研究・実践を統合した研修》理論や技能が、研究や現場の実践が、しっかりと結びついて得られる、幅広い、複合型の研修。いずれ、男性保育者向けの研修もできるようになれば、と思う。〈20歳代〉
③《研修日の設定》研修は基本的に土曜の午後にしてほしい。(参加したい研修に参加できるように)〔主任〕〈20歳代〉
④《代休の確保》保育者の休日の確保をしっかりとれなければ研修へ行こうと思う気持ちのゆとりがない。〈30歳代〉

表4 [保育者経験10~20年未満]

I 研修内容について
(1) 保護者との関わり方・子育て支援について
①～⑥子どもとの接し方より保護者との接し方が難しくなってきた。保護者とのコミュニケーションの取り方/事細かな親に対しての対応の仕方。/保護者との対応(今どきの親)〈30歳代〉保育者経験10~20年〕(6人)
⑦保護者心理。〈30歳代〉
⑧母子家庭、ネグレクトなどの問題がみられる保護者への対応。支援法。〈30歳代〉
⑨虐待についての研修はよく受けるのだが、具体的にだからどうしたらよいのか、ということの話はないので対応の仕方、接し方など話を聞きたいと思う。〈30歳代〉
⑩育ちそびれてしまっている子どもたち、大人になりきれない親に対する関わり。〈30歳代〉
⑪これから保育士にとって子どもに対する大切なこととはなんでしょうか? 親への指導も必要になるのでしょうか? 〈30歳代〉
⑫保護者とのコミュニケーションが取りにくくなには理解不可能な行動や言動が返ってくることもあり、自信のなくなる経験も多い。ときには、一生懸命になればなるほど空回りし、ストレスを感じる。仕事を辞めようかと思うこともある。そんなときもう一度意欲や自信を取り戻せる話を聞きたい。〈30歳代〉
⑬子育てに悩んだりいろいろ問題がある家庭への対処の仕方について。〈40歳代〉
⑭親とのかかわり方。〈40歳代〉
⑮親の必要としていることから、いま私たちにできること。〈40歳代〉
(2) 実技-「遊び」について-
①日常の保育の中ですぐに役立つ遊び(0歳児)〈30歳代〉

- ②専門技術が高められるような実践にそくした研修。〈30歳代〉
- ③年齢ごとに合った手遊びやゲーム等。〈30歳代〉
- ④⑤手遊び。〈30歳代〉(2人)
- ⑥簡単なリズム遊びや手遊び、またはマジックなんかができればいいと思う。特に誕生日の時に使えそうなものがあつたら教えていただきたいです。〈30歳代〉
- ⑦伝承遊びを若い世代の先生方に伝えてほしいです。〈50歳代以上〉
- ⑧体力を養う遊びやゲームなど。

II 研修方法について

(1) 他の園・保育者との情報交換・学びあい

- ①大学の先生の話より、現実に今働いている保育士や、保健師の声を聞ける研修。〈30歳代〉
- ②児童心理学や精神衛生学とか講演してくださる先生方の話は理屈としてはわかります。聞いた時はまた頑張ろうと励まされて帰ります。でも実情は大勢の子どもを受け持ち冷静さがなくなったり、つい注意をする方向に向いてしまったり、一日が戦争です。現状に合った現場を知っている方の講演、体験談が聞きたいです。〈40歳代〉

(2) 事例検討や「話し合い」

- ①事例をあげながら一緒に考えたりアドバイスしてもらう。〈30歳代〉
- ②事例などふまえた研修。〈30歳代〉
- ③現実の問題に結びつくテーマについての事例発表検討会〈40歳代〉

(3) その他

- 《他の専門職との連携》
- ①保育士以外の職業の人たち（医者、保健師、教師 etc）をはじめてのパネルディスカッション形式の研修をしてほしい。〈30歳代〉
- ②他機関との連携の方法。（具体的な事例から学ぶ）〈30歳代〉

表5 [保育者経験20年以上]

I 研修内容について

(1) 保護者との関わり方・子育て支援について

- ①～②保護者への対応。〈40歳代〉(2人)
- ③保護者とのコミュニケーションの取り方。ケースワークの理論と実践。[主任]〈40歳代〉
- ④保育者に求められていることが今は家庭で保育に欠ける子への補助だけでなく、親に対してのアドバイザリー的存在を多く求められている為、子供だけでなく親への対応の仕方などの研修も必要だと思われる。[常勤・40～49歳・保育者経験20年以上・公立]
- ⑤保護者との対応について。またカウンセリング等、アドバイス等で留意すべきこと等。[主任・40～49歳・保育者経験20年以上・私立]
- ⑥～⑨親とのコミュニケーションについて。[主任]〈50歳以上・保育者経験20年以上〉(4人)
- ⑩今から育っていく保育士たちがいかに親達と上手にコミュニケーションを取っていったらいいかなどの研修。[主任]〈50歳以上・保育者経験20年以上・公立〉
- ⑪保育士も保育のみでなく保護者支援、相談に乗れるような知識を身に着け具体的な例をあげながら指導してほしい。[園長・50歳以上・保育者経験20年以上・公立]

(2) 実技－「遊び」について－

- ①日常保育に役立つあそび、製作等。〈40歳代〉
- ②手遊び、リズム遊びの研修をもう少し増やしてほしい。〈50歳代〉

II 研修方法について

(1) 他の園・保育者との情報交換・学びあい

- ①いろいろな園の視察。
- ②実践（見学などがしたい）〈40歳代〉
- ③各園の交流（いろいろな事例の）〈50歳代〉
- ④大学の教授ではなく、実際に関わっている園長、主任の先生。[主任]〈50歳以上〉

(2) 事例検討や「話し合い」

- ①実例をあげてそれに答えていただける。自分の保育所で実際にあったことに対してどのように対処したかなどを話し合える。[主任]〈50歳以上〉

(3) その他

- ①《他の専門職との連携》保育士単独の研修だけでなく、保健師、栄養士とのつながりを持って聞けるような研修をしてほしい。〈40歳代〉
- ②非常勤なので研修には参加させて頂けません。常勤者ばかりでなく非常勤保育者にも研修の機会をいただきたいと思います。〈40歳代〉
- ③関係機関での研修が重なる内容が多い（特に今年は食育、子育て支援）等が感じられた。[主任・50歳以上・保育者経験20年以上・私立]

表6 [法律や制度について]

- 保育所にどんどん増えている事業についての説明：主任という立場なのでいろいろ聞く機会があるが、保育士の大半が事業の内容、補助金について何も知らないので、経営者側にいいように説明されて、納得いかないまま、ただ仕事が増え続けているので、きちんと理解して仕事をしたり意見を言えるようにしたい。[主任]〈20歳代〉保育者経験5~10年
- 保育制度改革についてや、行政の動きについて～保育士もしっかり理解して、保育の現場に立つ立場として働きかけたり発言できるように。〈30歳代〉保育者経験10~20年
- 実技研修、保育についての課題は、園内で研修しながら学べるが、今後保育園はどのようになるのか、国が補助金を停止したときには…と思うと、私たち保育士は、どうなるのか。子育て支援を…と行政から言われる中で、運営は非常にきびしくなるのでは…。このような研修を、わかりやすく知らせてもらいたい。[主任]〈40歳代〉保育者経験20年以上
- 変わりゆく行政の説明を詳しく知りたい。/幼保一元化・総合施設について（現状、メリット、デメリットなど）/第三者評価について/国の制度をよくするための力になれるような研修。制度の内容も知る。

表7 [人間性、意識]

- 保育士という仕事は、今も昔も、もっと聖職であるべきだと思います。事務職、一般職とは異なり、「人のために」という考え方、意識に乏しい人が多くなりました。技術研修もよいが、そうしたことが研修の中では常に欠けている。[園長]〈40歳代〉保育者経験10~20年未満
- 特に新人保育士には、保育士以前に社会人としての常識的な内容を。子どもは保育士の姿を見て育っていくこと等、生命を預かる大切な仕事の自覚を持つ研修を希望します。[主任]〈50歳以上〉保育者経験20年以上
- 保育者は子育てに対するスーパーマンでなくてはなりません。2年の養成課程で福祉の理念、技術、人間性などマスターできていない部分があります。専門職としての認識をもっと持たなければ、体力的にも、精神的にも、技術や知識の面においても、統かないと思います。研修に求められること。
 - ①保育所や児童福祉を取り巻く社会情勢、②人間性を磨いていくこと、③保護者との対応、④障害児への知識、⑤福祉の理念と心構え、⑥専門的技術の習得
- 保育士としての資質（人間性）の向上。[園長]〈50歳以上〉経験20年以上

支援を……と行政から言われる中で、運営は非常にきびしくなるのでは……。このような研修を、わかりやすく知らせてもらいたい。[主任]〈40歳代〉保育者経験20年以上」

他方、「人間性や保育者としての意識の向上」に関する研修を希望するという回答は4人からあつたが、そのすべてが、主任、園長である。

「保育士という仕事は、今も昔も、もっと聖職であるべきだと思います。事務職、一般職とは異なり、「人のために」という考え方、意識に乏しい人が多くなりました。技術研修もよいが、そうしたことが研修の中では常に欠けている。[園長]〈40歳代〉保育者経験10~20年未満」

「特に新人保育士には、保育士以前に社会人としての常識的な内容を。子どもは保育士の姿を見て育っていくこと等、生命を預かる大切な仕事の自覚を持つ研修を希望します。[主任]〈50歳以上〉保育者経験20年以上」

といった回答である。人間性や意識の向上が、研修によってどれくらい達成されうるのか、この点は検討する必要がある。

これまでの調査結果のまとめや今回の自由記述の分析をもとにすると、主任や園長クラスの意識、あるいは保育者経験が長い年齢層の意識は、そうではない保育者とはかなり異なる。この立場や年代の差が、保育者のリカレント教育や専門性と関連するのか、影響しないのは、そのことは次章以下で、検討したい。（次章以下は（その2）へ）

注

注1) リカレント (recurrent) とはそもそも「回帰する」「還流する」「循環する」という意味で、1960年代末、スウェーデンの経済学者によって初めて用いられ、経済協力開発機構 (OECD) が1970年代から公式に採用した生涯教育構想である。社会人が必要に応じて学校へ戻って再教育を受ける、循環・反復型の教育体制のことをさす。本研究では、専門職の研修、現任訓練、継続教育 = 「リカレント教育」として用いる。

注2) 数としては少ないが、免許・資格を有しない職員（園長ほか）もあり、乳幼児期の子どもの保育に携わるというところを条件として保育者を規定する。また、児童養護施設等の児童福祉施設にも保育士の資格を持

つ職員がおかれるし、学童保育というように学齢期の子どもにも保育という言葉を使うが、本研究では、それらの職員のことはあつかわない。

注3) その背景には、個人的なことで恐縮だが、筆者は大学においては幼児教育を学び、社会福祉の大学院に進んでおり、保育者と社会福祉の関連性にはもともと関心をよせていたこと、研究テーマの一つが障害児保育・福祉であるために、保育と福祉の連携について研究を進めていることがある。

注4) 園名、回答者名は無記名ではあるが、より自由に意見が記入できるように、各園で集めて返送していただく方法をとらず、直接各人より返送していただいた。

注5) ①川池智子、「子育ち・子育て支援」をめぐる保育政策の課題（その2）－2地域の保育者の調査を通して－、山梨県立女子短期大学紀要 第38号：47－62、2005

②川池智子、「子育ち・子育て支援」をめぐる保育政策の課題（その3）－障害児等、特別な配慮を必要とする子どもと親への支援－、山梨県大学人間福祉学部紀要 第1号：43－64、2006。自由記述の

部分については、一部は先の論文に利用したが、量も多く、まだ十分な分析に至っていない。

注6) カテゴリー化できない回答は表にしていない。

注7) 注1) を参照のこと。

注8) 同上

引用文献

- 1) 蟻塚昌克、福祉現場の専門性を高める課題、月刊福祉、2006年6月号、12頁
- 2) 鑑さやか・千葉千恵美、社会福祉実践における保育士の役割と課題～子育て支援に関する相談援助内容の多様化から～、保健福祉学研究（東北文化学園大学）、2006、28頁
- 3) 岸井慶子、保育現場から保育者の専門性を考える、発達83号 83(21) 2000年、16頁
- 4) 河合隼雄、子どもと学校、岩波新書、1992
- 5) 村井尚子、保育者における専門性としての「タクト」とその養成に関する一考察、保育学研究第39巻1号、日本保育学会、2001 45－46頁

表8 平成16年度 山梨県児童家庭課主催の保育士研修

研修名	講師	研修方法・テーマ	参加人数
初任保育士研修会		グループ討議「保育士になって思うこと」	92名
	民間レクレーション関連教育施設所長	講義・実技「幼児の遊びと保育者の関わり」	
	前山梨県保育士会長	講義「新任保育士に望むこと」 グループ討議発表・意見交換会	
	県立少年自然の家職員	講義・実技「身近なものであそび発見」	
障害児保育研修会	県立ろう学校乳幼児教育相談担当者 県立盲学校教育相談担当者	講義「障害の理解と保育方法」 ～視覚障害・聴覚障害・肢体不自由等の身体障害をもつ児童への対応	84名
	知的障害児通園施設園長	講義「障害の理解と保育方法」 ～知的障害・多動傾向への児童への対応	
乳児保育研修会	県内大学教員	講習「乳児の子育て相談」 ～カウンセリングを活かした家族支援	144名
	保健福祉センター保健師・管理栄養士	講義「乳児の保健と安全、子育て支援について」 ～乳幼児の事故防止対策・乳児の健康支援・保育所との連携による食育推進	
育児相談研修会	県外児童養護施設児童指導員 (大学非常勤講師)	講義「保育所における家庭支援」	106名
	臨床心理相談室・臨床心理士	講義・演習「カウンセリングのこころ～子育て相談に関わる時の心構え」	
幼児保育研修会	県内大学教員	講義「児童虐待に対する保育所の対応」	101名
	歯科医院院長	講義「保育所(園)における歯科保健」	
職員特別研修会	県内大学教員	講義「子どもの発達と対話的保育実践」	130名
	保育園園長	講義・実技「あそびでコミュニケーション力をつけよう」	
事業所内保育施設等保育従事者研修会	県内大学教員	講義「異年齢児童の保育内容と環境について」	21名
	児童福祉施設栄養士会役員	講義「乳幼児の食事について」	
	日本赤十字社山梨県支部	講義・実習「乳幼児の病気と手当てについて」	

表9 平成16年度 山梨県保育所連合会の保育士研修

保育所（園）夏期特別研修会	県内大学大学院教員	講演①「総合施設について」	141名
	県外大学大学院教員	講演②「保育所における食育に関する指針について」	
保育士研修会	県児童相談所職員	「発達がもつれている子の見分け方と導き方」	159名
主任保育士研修会	県福祉保健部児童家庭課職員	行政説明「主任保育士に向けて」	216名
	4つの保育園の園長がコーディネーター・シンポジスト	シンポジウム「第三者評価を受けて」	
	県外大学教員	講演「保育士と親とのコミュニケーション」	
保育所（園）長研修会	県福祉保健部児童家庭課職員	行政説明「保育所をめぐる現状と課題」	141名
	研究所代表	講演「総合施設構想の課題と可能性を考える～総合“施設”より総合“機能”を」	
	研究所 所長	講演「子どもの感性と音楽～心の環境づくりを考える」	

表10 平成16年度 山梨県保育士会の保育士研修

研修名	講師	研修方法・テーマ	参加人数
造形教育研修会	人形劇団主宰	「身近なものをつかっておもちゃ作り」	149名
保育士研修会	県外大学教員	「子育て支援について」	119名
保育士・調理員・栄養士等研修会	小児科 医師	「食物アレルギーと除去食療法」	154名
音楽リズム講習会	民間乳幼児研究所所員	「保育に生かせる手遊びなど」	135名

表11 平成16年度 A市保育士会の保育士研修

研修名	講師	研修方法・テーマ	参加人数
総会記念講演	県内大学教員	「保育に活かすカウンセリングマインド」	245名
新任研修	保育所所長	「今、保育に求められているもの」	58名
理論研修	県内大学教員	「今、子育て・保育で大切にしたいこと」	140名
主任保育士県外施設視察研修		「異年齢保育と保育環境」	25名
主任研修	視察先の県外保育園園長	「発達段階を重視する保育について」	25名
保育士施設視察研修		「地域性を生かした保育内容」	23名
合同研修	県外大学教員	「子どもの健全な育ちのために」	276名
実技研修	県内大学教員	「保育に活かせる手作りおもちゃ」	120名
レクリエーション		ダンス及びゲームを数種	120名

※他に、「自主研修」、「5グループ活動」が実施されている。

表12 平成16年度 B郡保育士会の保育士研修

研修名	講師	研修方法・テーマ	参加人数
施設研修（所長）		県外保育所視察	24名
施設研修（主任）		県内保育所視察	24名
保育士研修	県内大学教員	「子育て支援」	
研究委員会 *月1回		「0歳児保育」	24名

※他に全体研修が年1回開催されている。

●表8～12については、各団体からいただいた資料から保育士を対象としない研修、固有名詞（講師名など）、関係団体、場所等を除き、あらためて表をつくりなおしたものである。これらの資料への言及は第2報以降となる。

Specialization and Recurrent Education of Childcare Nursery and Kindergarten Teachers about "Support of Child Rearing":

— A Study Based on the Result of the Survey to Childcare Nursery Teachers —

KAWAIKE Tomoko

Abstract

This research is to investigate specialization and recurrent education of childcare nursery and kindergarten teachers about "support of child rearing" from the viewpoint of social welfare. The writer carried out a survey about "support of child rearing" in 2004 and analyzed comments on "in-service training." The survey was done on members of the two associations of childcare nursery teachers in Yamanashi. Among the categories mentioned in the questionnaire, the teachers hoped to have in the training these four: Better relationship with parents and support of child rearing, "Children's play", Exchanging information and learning with teachers at other childcare facilities, and The case study and "discussions". Moreover, this analysis has revealed the features of each age group of teachers. The paper consists of my perspective and the first and second chapters of the research; the following chapter will be published in the next year.

Key words : support of child rearing, childcare nursery and kindergarten teachers, recurrent education